

筆作る

熊野筆伝統工芸士

人

KUMANOFUDE
Traditional Craftsman

2024

筆作る人

熊野筆伝統工芸士

熊野が誇る 「筆作る人」

広島県安芸郡熊野町は日本の生産量を誇る筆の都です。この町に住む人のうち約一割が筆の関連産業に従事しており、熊野の暮らしは筆とともにあります。いっても過言ではありません。

筆の材料を商う人、筆を売る人、筆で書く人、描く人……そして、筆を作る人。そんな「筆作る人」の頂点ともいえる存在が「伝統工芸士」です。

筆に関わる仕事は、「筆作り」の伝統が受け継がれてきたからこそ成り立っています。伝統の技術は、一度失われてしまえば二度と手に入りません。私たち熊野筆事業協同組合は、その技を守り継承するため、伝統工芸士の認定や次世代の育成を担ってきました。

彼らの技や思いを伝えることで、次世代の担い手を育てたい。そんな願いを込めてこの冊子を作りました。



碓井 真光	Usui Shinko	01
荒谷 城舟	Aratani Jyosyu	03
仁井本 誠研	Niimoto Seiken	05
實森 得全	Sanemori Tokuzen	07
南部 豊栄	Nanbu Touei	09
香川 翠皐	Kagawa Suikou	11
小鳥田 晃祐	Kotorida Koyu	13
湊 剛雪	Minato Gosetsu	15
片平 游哲	Katahira Yutetsu	17
實森 得応	Sanemori Tokuo	19
寺垣内 雄翠	Teragauchi Yusui	21
大久保 順敬	Okubo Jyunkei	23
中川 聖峰	Nakagawa Seiho	25

戦後の暮らしを支えてくれた

筆がえがき出すもので世界の和が作りた

真光の今

「毛の段階で、どれがどの筆になるかは決まっているんですよ。そうつぶやきながら、皮のついた原毛を素早く丁寧を選び分ける真光氏。

筆の良し悪しは、長さや毛質ごとに毛を選び分ける「選毛」*^{せんもう}を始め、筆作りの初期工程（下仕事）で決まるといいます。

羊毛筆を得意としており、代表作は1950年に発売した「墨吐龍」^{ぼくどりゅう}。柔らかく細い毛がたっぷり墨を吸い、運筆で出てくる墨の量を調節できる玄人好みの筆です。

経験が足りない職人は、さか毛やすれ毛を取る工程で繊細な毛まで取って捨ててしまうので、熟練の技がなければ決してこの

碓井 真光

Usui Shinko

伝統工芸士認定年月日：1981年12月11日



*選毛（せんもう）：原毛から筆に使える良質な毛を選び取る作業

筆はできません。柔らかすぎても使いこなせる書家が限られますが、それだけに根強いファンが多い一品です。

真光の過去

中学校を卒業してすぐに羊毛筆を得意とする工房に就職し、毛の扱い方を学びました。「先輩の技を目で見て盗め」という



時代で苦勞もありましたが、終戦直後で日本中が物資の不足に喘いでいた中、「筆作りの仕事が暮らしを支えてくれました」と振り返ります。

熊野筆が国から伝統的工芸品の認定を受けた1975年には既に十分な経験と技術を持っていましたが、女性であることからすぐには認定試験を受けられませんでした。その逆境に負け

ず、1981年には女性初の伝統工芸士の認定を受けました。「若いころは負けず嫌いだったかもしれないねえ」と笑う真光氏。男性中心だった筆司の世界に、女性が活躍する足場を一步步つ実力で築いてきました。

真光の未来

伝統工芸士に認定されて以来、熊野筆の魅力を伝える活動に力を入れてきました。振興活動でイギリスやアメリカ、フランスなどの諸外国を訪れ、世界の広さを実感したといいます。

通信機器の情報だけでなく「手を動かして筆で文字や絵をかくことで繋がりが生まれ、世界の人の和が作れればいいなと思うんですよ」という言葉には、戦争を経験した世代ならではの重みがあります。

町内の観光施設である「筆の里工房」への花の植え付けや英語標識の導入、後継者育成に向けた教育制度整備など、次世代を見据えさまざまな提案をしてきました。「何十年も経たないと、何事もうまくいきません」。高品質な筆を作りながら草の根の活動を続けることで、筆作りの未来を支えています。



伝統の書筆があつてこそその熊野筆

選毛から作る「味がいい」筆

城舟の今



荒谷 城舟

Aratani Jyosyu

伝統工芸士認定年月日：1994年2月25日



城舟氏のこだわりは、書き手の書体に徹底して応じる筆作りです。書家本人や書家から注文を受けた筆問屋から、書きたい書体や出したい線について、まずじっくりと話を聞きます。近年では「毛先から少し下にやや腰のある筆」という要望が増えました。細やかに要望に対応するため処理済みの束毛[※]はあまり使わず、毛の下処理から工房で手掛けしています。

年齢を重ねるほど良し悪し
が分かってくるため、筆の生産量は減りましたが、品質には一層磨きがかかっています。さか毛やすれ毛を取る工程では、親指の付け根を何度か毛

※束毛（そくもう）：束ねた状態で仕入れる下処理を済ませた毛

先で撫で、感触を確かめます。「味を確かめようなんです。30年ぐらい続けて、やっと味のいい筆ができるようになるんですよ」と笑います。

城舟の過去

子どものころから筆司だった父を手伝い、筆作りに親しんできた城舟氏。新制中学を卒業し



てすぐ、自宅の工房で働き始めました。当時は若く遊びたい盛りだったので、夜遊びをしては居眠りし、道具の櫛で文字通り叩き起こされたこともあります。当初は父や筆問屋からの指示に納得がいかないこともありましたが、言われたことを素直にこなしていると技術が身に付き仕事が楽しくなってきました。伝統工芸士になったのは50代

ころ。認定から何年か経って、今のように「使う人の書体に応じた筆」を意識して作るようになりしました。今は退きましたが長く伝統工芸士会の会長を務めたため、メディアにも何度も登場し、熊野筆のPRに尽力してきました。

城舟の未来

現在は後継者を育成するため筆司会毛筆製造技術研修会で講師を務める城舟氏。化粧筆や画筆ももちろん大切ですが、書筆があつてこそその熊野筆だと考えています。「書道や書筆の魅力が広く伝わり、熊野が発展してほしい」と願いを込めます。今まで多くの弟子に筆作りを指導してきましたが、一人前の筆司になれた人はごくわずかだといえます。10年ほど修行して

やっと、筆司として大成するかが見えてくる職人の世界。好きでなければ続けられません。長年の経験の中で身に着けてきた大切なコツの部分は、後継者として認めた相手にしかなかなか教えられないといいます。研修会で教えている弟子が、一人前に育ってくれることを期待しています。



妥協なく筆と向き合い

会心の出来を追求し続ける



仁井本 誠研

Niimoto Seiken

伝統工芸士認定年月日：1994年2月25日

誠研の今

「筆作りは自分自身との戦いであり、人生そのもの。いくつになっても技術を磨き続けており、作るたびに『これぞ会心の出来だ』と思うんですよ」と、柔和な笑顔を浮かべる誠研氏。

作業を始めると、途端に表情は真剣そのものになります。彼の筆作りには一切の妥協がなく、常に全力勝負です。

毎夜布団の中でその日の作業を一つひとつ反すうし、73あると言われる工程で1つでも不十分だった点があれば、翌朝4時には工房に入って完璧な状態に仕上げずにはいられません。

すべての筆は、筆問屋や書家の注文に応じて書く人のた

めに作るもの。原料の状態が変わっても同じ書き心地を再現する確かな腕は、厚い信頼を得ています。

誠研の過去

筆作りに生涯を捧げてきた誠研氏ですが、実は筆司の道を諦めたことがあります。中学校を卒業してすぐ、やはり熊野



筆の筆司だった父に勧められて10年間修業を積みましたが、若くして結婚したため安定して妻子を養える一般企業に就職。そのまま17年働き、父が亡くなったあと地元に戻って再び筆司の道に入りました。

ところが3年経っても、量産品としては優れた筆が出来るもの、書家の要望に応えられる筆が出来ません。悔しさに涙を

滲ませ、お世話になってきた筆問屋に辞めようかと思っていることを伝えると、仙台の筆司のもとで修行してみてもどうかと提案されました。その工房の技術は父の筆作りと共通点が多く、父の教えを改めて振り返る転機となりました。

誠研の未来

仙台から帰って2年ほどは、仕上がりを確認してもらおうために作った筆を師匠に送り続けました。「もう大丈夫と言ってもらえたときは嬉しかった」といいます。

次なる課題は後継者の育成です。弟子を取ったり、熊野筆事業協同組合の主催する筆司会で若手の指導に当たったりしていますが、書家に満足してもらえないレベルの筆を作れるまでの人

を育てるには時間が必要です。「ここを少し短くした方がいい」などとアドバイスすると理由を聞かれますが、経験と勘を根拠にした判断は口で説明しても伝わりません。「私もそうでした。もうひと皮剥けると、自然にわかってくるだろうと思う人はいません。そういう人を一人前の職人に育ててあげたい」。誠研氏の挑戦は続きます。



代々続く筆司の家系で

次世代へ何をどう繋いでいくか



實森 得全

Sanemori Tokuzen

伝統工芸士認定年月日：2000年2月25日

得全の今

「筆の良さは、使ってみないとわかりません。まずは使ってみて、自分に合った筆を選んでほしいですね」と話す得全氏。原料の毛が徐々に手に入りにくくなってきた20年くらい前から、選毛や毛組※により工夫を凝らして、その筆本来の書き味を再現するようになりました。ゴルフから魚釣り、野球、ソフトボールまでこなす多趣味で凝り性な性格が、筆作りにも生きています。父からは「筆司が書道をするとは自分好みの筆を作ってしまう」といわれ、使う人に寄り添った筆作りを心がけてきました。細筆から超特大筆までどんなサイズの筆も作りま

※毛組（けぐみ）：選毛で選んだ毛を、量を決めて組み合わせていく作業

すが、大きな筆は作れる筆司が限られるため、発注がよく入ります。伝統工芸士会の会長としてメディアに出演する機会も多く、PRにも尽力しています。

得全の過去

祖父の代から続く筆工房の家に生まれた得全氏。小学生の得全氏を膝に抱いていた祖父が倒



れてしばらくして亡くなった時、家業を継ぐのが運命だと感じ、将来筆を作ろうと決めました。

筆司になることは意識していましたが、物づくりが好きで高校の機械科を卒業し、大手自動車メーカーに就職。エンジン開発に携わり、一部の工程で改善提案をするなど勤務時代にも妥協せずより良い物づくりに取り組みました。

3年ほどで退職して筆司の道に。父の先代得全は「見て習え」という姿勢で、間違っている時だけ注意を受け、手探りで仕事を身につけたといえます。当時は伝統工芸士は1軒の家に1人という慣例があり、父が亡くなった2年後に伝統工芸士の認定を受けました。

得全の未来

得全氏の息子は大学卒業後すぐに筆司となり、慣例も変わってきたことから既に伝統工芸士の認定を受け活躍しています。「どんな挑戦をしていくのか楽しみです。私と考え方が違う部分もありますが、息子には自由に挑戦してほしい。父を見習い、できるだけ口出しせず見守っていきたい」と期待を込めます。筆作りの伝統を守るには、使う人を増やしていくことも大切。

多くの人に書道に興味をもってもらえるよう、子どもの頃から筆に親しむ機会を増やす草の根の活動が必要だと考えています。筆作り体験に来た子どもたちは作った筆を「宝物にする」「使わずに飾っておく」といいますが、「筆は書く道具です。使って初めて真価がわかるものなので、ぜひ使ってほしい」と呼びかけています。



師匠が得意とした羊毛に特化

3時起きで鍛え続ける空手の技も生かした筆作り



南部 豊栄

Nanbu Touei

伝統工芸士認定年月日：2000年2月25日



豊栄の今

柔らかな書き味の羊毛筆に定評のある豊栄氏。工房に入る注文はほぼ羊毛筆です。羊毛筆は切っ先が生命線。さか毛やすれ毛を取り除く作業には徹底して時間をかけます。

80代を迎えてもなお現役で筆を作り続ける体力を維持するため、毎朝3時に起きて3時間近く空手の型を修行する日課を若い頃から続けてきました。

瓦は手刀で8〜10枚割れるといい、テニスも嗜むスポーツマンです。修行を積んだ工房の師匠は同じく羊毛に特化しており、「毛^{*}もみには空手の手を使え」と教わりました。その力加減は豊栄氏独特のもの

*毛もみ：稲わらの灰をまぶした原毛に火のし（アイロン）をして毛をまっすぐに伸ばし、揉んで表面を傷つけることで油分を抜いて墨含みを良くする工程

のです。

イノシシ毛を使ってみたり、白い羊毛をタマネギの皮で茶色く染めたりと、少し変わった筆作りも独自に研究しています。

豊栄の過去

「子どもの頃の友だちはみんな、学校終わりに筆作りのアルバイトをしていたものです」と話す



豊栄氏。家族で営む筆工房の三代目に生まれ、筆作りを間近で見ながら育ちました。

伝統工芸士のもとに弟子入りして何年か働いて独立したあと、生活のために一般企業に就職。製造業の会社で、思い切りがないことから「厚い鉄板を切らせたら右に出る者はいない」と言われていました。30代で退職し、知人の誘いで

再び筆司の道に入りました。子どもの頃の経験から、すんなりと仕事に戻れたといいます。

そこからさらに10年ほど修行を続けていると、徐々に自分でも納得のいく品質の筆が作れるようになってきました。書家や筆問屋からの評価も上がってきたそうです。

豊栄の未来

「私に求められているのは羊毛筆です。今のまま、期待に応えられる品質の羊毛筆を丁寧に作り続けたい」。そう話す豊栄氏。科学技術の進歩に伴い、筆作りの新素材や新工法も生まれています。豊栄氏は長い時間をかけて何人も職人が受け継ぐ中で磨き上げられてきた伝統的な技法に、絶対の信頼を置いています。

分業によって大量生産を可能とした工場のおかげで熊野筆のシェアは保たれていますが、すべての工程を一人でこなせなければ伝統工芸士の認定は受けられません。「今から新たに弟子を取ることは難しいけれど、伝統工芸士を目指して頑張っている若い職人のことは応援したい。熊野全体が良くなってほしい」と期待を寄せます。



子育てがひと段落して手に一生ものの職を
「あの筆が良かった」と言ってもらったために



香川 翠臯

Kagawa Suikou

伝統工芸士認定年月日：2007年2月25日

翠臯の今

翠臯氏の代表作は、伝統工芸士の認定を記念して発売した「緑風」です。得意とする柔らかな羊毛に、硬い山馬さんばの毛をほんの少し混ぜた筆で、墨含みがよくほどよい腰があるため「扱いやすい」と今も人気です。水墨画に使う愛好者も少なくありません。

定番商品に加え、天尾あまおにイノシシの毛を混ぜたり、クジヤクやダチョウ、ハクチョウの羽を使った特殊筆を作ったりと、書家の要望に応じて常に新しい挑戦をしてきました。10年ほど修行したころ、ようやくイメージ通りの筆を作る技術が身についてきて、楽しみを見出せるようになった

※天尾（あまお）：馬のしっぽ部分の毛

といえます。
「やればやっただけ反応があり、喜んでもらえる。やりがいがあります」と作業に打ち込みます。

翠阜の過去

実家の母が筆作りの職人で、幼少期から作業を手伝ってきた翠阜氏。物づくりが好きで洋裁



学校に進学し、仕立ての仕事につきました。結婚、出産を経て子育てしながらできる仕事を探し、今も勤める筆の製造会社に35歳で就職。言われるままに動くだけのところから、自分で考えて毛を組み合わせ、見た目や書き味を再現する技術を身につけました。

周囲からは「工場では工程の一部しか担当しないから、伝統

工芸士になるのは難しい」と言われましたが、「職人を育てよう」という会社の方針もあって見事認定を取得。伝統工芸士としての責任感から、さらに技術が向上したといえます。
「技術は誰も盗る者がおらん」。昔聞いた父の言葉の通り、手に一生ものの職を付けることができました。

翠阜の未来

翠阜氏は今も現役で毎日筆を作りながら、後進の指導に当たっています。女性2人に加え、最近男性が新たに職場に入りました。「仕事は楽しいです。元気な間は身体に気を付けて働きながら、彼らを一人前に育ててあげたい」と意欲を見せます。

小学1年生から書道を教え、小学4年生全員に筆作りの体験

もさせる熊野町。翠阜氏にとっても、筆はずっと身近な存在でした。
「町の人口が減って筆作りの職人も少なくなってきたのは、何とかバランスを取って、熊野筆を中心とした文化をいつまでも残してほしいです」と願いを込めて話します。



「六十の手習い」から伝統工芸士へ

熊野筆の魅力を広げる使命を胸に



小鳥田 晃祐

Kotorida Koyu

伝統工芸士認定年月日：2007年2月25日

晃祐の今

「筆作りの要は選毛かなめです」と断言する晃祐氏は、堂々とした体格が目を引く大柄な男性です。中学卒業後は相撲や柔道の稽古に励み、相撲で国体に出場。相手と組むスポーツならではの経験が筆作りにも生きていと言います。

状態の悪い毛からはそれなりの筆しかできないため、より良い毛を選び取るための目を養うことが筆司としての成長に欠かせません。

書道の初心者から書家まで扱いやすいイタチ毛の書き味を理想としており、それを再現するための毛や軸の組み合わせに想像力と創造力が必要だと考えます。

「もうちょっと細く、硬く、柔らかくなどのご意見から気持ち汲み、相手を思いやる心で作る。それを心がけています」と、繊細な作業に打ち込みます。

晃祐の過去

晃祐氏の父は戦時中満州に渡り、シベリアに抑留されて亡くなりました。母は家業の筆作り



をしながら3人の子を育て、長男だった晃祐氏は率先して家事も筆作りも手伝ったといいますが、大柄なスポーツマンですが、中学生の時から毛もみや櫛ぬきなどの繊細な基礎作業を毎日こなしてきました。

21歳で大手自動車メーカーに就職して、筆司になる夢のため55歳で退職しました。筆の製造会社にパートタイマーとして入

社し、真面目な働きぶりを評価されて2年目に正社員に登用されました。何十年ぶりの筆作りでしたが、手は昔の作業を覚えていました。尊敬する会社の代表の作り方を、目で見て盗んだといえます。負けず嫌いな性格から人一倍努力し、68歳で伝統工芸士の認定を受けました。

晃祐の未来

地元・熊野町を深く愛しており、「町に貢献できることは何でもしたい」と話す晃祐氏。熊野筆の知名度を上げることが伝統工芸士の大切な使命だと考えており、政財界の著名人にもたくさんのお名刺を配り、熊野筆の宣伝に繋げてきました。

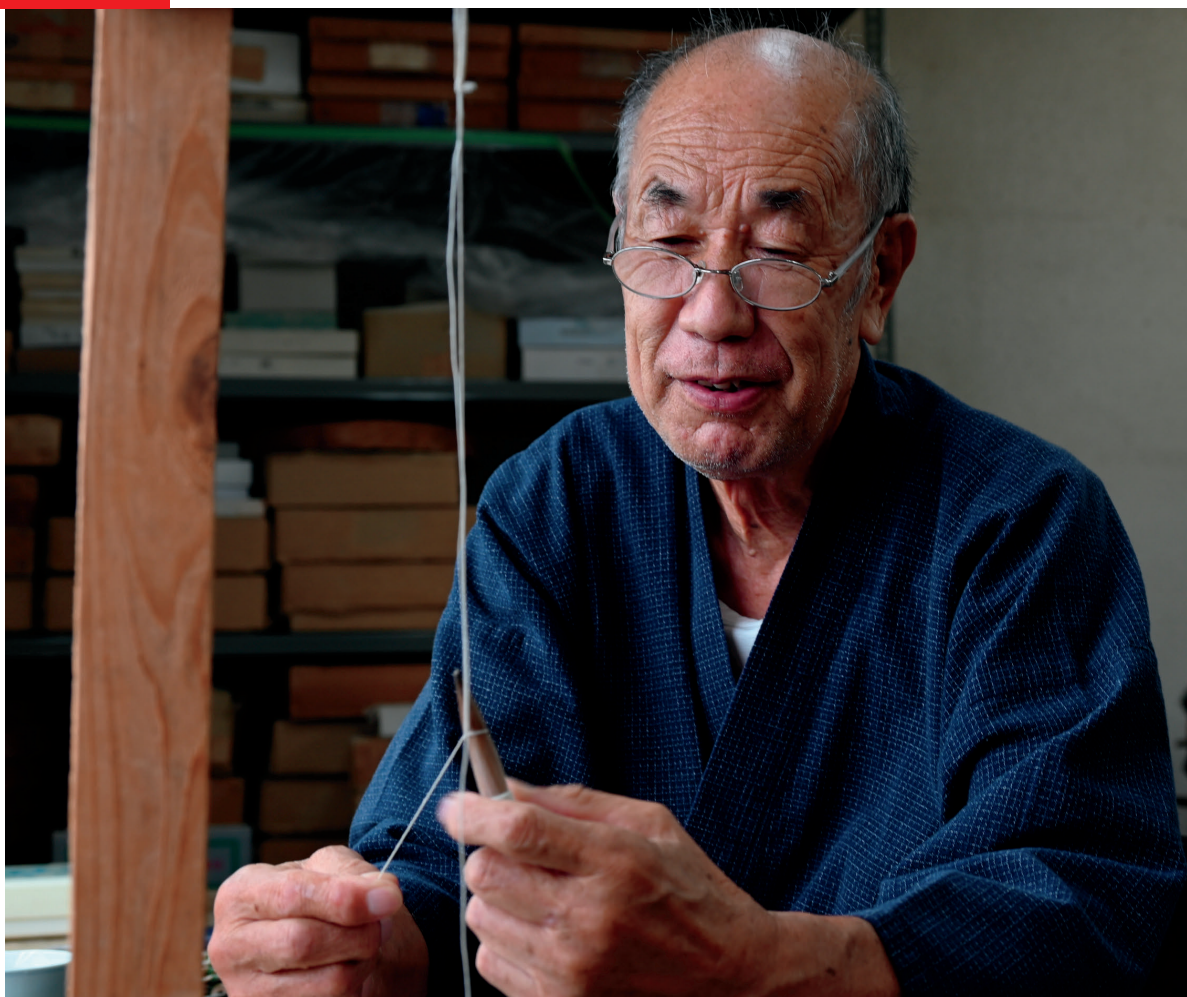
会社の代表と海外に買い付けに行ったり、筆司の仲間と各国で筆文化の振興を図ったりする

中で、世界情勢にも目を向けるようになりました。原料毛が不足する中、人工素材の開発に期待をかけています。これまでの常識にとらわれず、時代に合う方法を探っていくことを提案。「天然毛が手に入らなくなっから開発しても間に合いません。二歩も三歩も先を考えて動かないと」。今こそ、未来のための変革の時だと考えています。



川尻から熊野へ

産地を跨ぎ筆を作り続けて見えてきたもの



湊 剛雪

Minato Gosetsu

伝統工芸士認定年月日：2008年2月25日



剛雪の今

剛雪氏は基本に忠実に、手を抜かない丁寧な作業で筆を作ります。「最初の毛もみが不十分だと、墨を十分に含みません」。また毛もみした毛束は、必ずよく梳かして切り揃えます。そうすれば必要最小限の毛で美しい形の筆ができますが、毛がもつれたままだと形が乱れ、毛量で調整するため書き味にも影響してしまいます。

筆作りを始めて20年ほど経ったころ、同じく筆司だった父の作業を観察していて気付きました。さらに修行を積んだ40代のころ、「そろそろ一人前になってきたかな」と思っていた矢先にクレームを受

け、改めて「手を抜いてはいけない」と自分を戒めたこともあり。筆作りの工程には一つひとつ意味がある。それを実感しながら丁寧に作業を進めます。

剛雪の過去

広島県内のもう一つの筆の産地・川尻で生まれ育った剛雪氏。中学校を卒業してすぐ、既に修



行を始めていた兄とともに、筆司だった父のもとで筆作りを始めました。休みも一切なく遊びにも行けず、泣きながら父の仕事を目で見て覚える日々。転機が訪れたのは10年後でした。熊野の筆の製造会社から誘われ、思い切って移住。兄も同じ会社で働き始めました。

当時は筆の需要が非常に高く、原料毛の買い付けで世界中を飛

び回ったり、たぐさんの工場スタッフを指導したりと多方面で活躍したといいます。同時に故郷の父の作業を観察して勉強を続け、一つひとつの工程の大切さなどにも気付いていきました。会社の後押しを受け、50代で伝統工芸士の認定を受けました。

剛雪の未来

「筆作りは自分を育て食べさせてくれた宝です。期待に応える筆を作り続けたい」と話す剛雪氏。伝統工芸士の認定を受けるなど、自分が思っていた以上の成長を遂げることができました。他の産地に修行に行く職人が多い川尻に比べ、地域内の職人が互いに弟子を取り、教え合う熊野の文化。自分を育ててくれた熊野に、職人がもっと増えて栄えていくことを願っています。

これまで教えた弟子の中に「筋がいい」と思った人もいましたが、原毛を選び分ける作業を身に着けるだけでも10年かかるといわれる世界です。毛の量や長さのバランスを整える毛組みを身に着けるには、経験を積むしかありません。「独り立ちできるかどうかはその人次第。できる人が教えてあげればいい」と次世代に期待をかけます。



かつて憧れた「かつこいい伝統工芸士」の道へ
変わらないために変わり続ける提案



片平 游哲

Katahira Yutetsu

伝統工芸士認定年月日：2013年2月25日

游哲の今

游哲氏が得意とする筆は10種類以上の毛を混ぜ合わせて作る「兼毫^{※けんごう}」です。種類ごとの毛の特性を理解し、混ぜ合わせた時の弾力の変化を把握していなければ思った通りの筆になりません。楷書、行書、草書、近代詩……筆の価値は書くものに依じた墨跡が出せるかどうかで決まり、値段では表せないと游哲氏は考えます。

例えば高校生が授業で使う筆は、初心者向けに扱いやすいブレンドで作ります。かつてはブレンドに失敗し、どうやっても修正できず泣く泣く捨てたこともありましたが、今では修正できないような失

※兼毫（けんごう）筆：さまざまな種類の毛を混ぜ合わせて作る筆

敗はなくなりました。「毛のブレンドを考え、頭の中の理想に近付けていく過程が一番楽しい」と、やりがいを語ります。

游哲の過去

物づくりが好きで、自動車整備士の仕事に就いた游哲氏。母が筆作りに関わる仕事をしていた関係で、筆問屋の社長から営



業の仕事に誘われました。そこで思い出したのが、かつて目にした伝統工芸士の姿です。

小学校の講演で、同じ町内に全国に誇る伝統産業を守っている伝統工芸士がいることを知り「なんてかっこいいんだろう。いつか自分もなってみたい」と憧れました。

時間が経ち自分でもその夢を忘れていましたが、社長の誘い

をきっかけに思い出し、筆作りの道に入りました。どちらかといえば手先は不器用だったので最初は苦労しましたが、作業を覚えること自体にはそれほど時間はかかりませんでした。今では筆作りに重要なものは器用さよりもセンスだと感じています。

游哲の未来

游哲氏自身は試し書きをする程度ですが、父は書道の師範代です。使う人が身近にいることで「筆遣いを楽しんでもらえて、書く人の理想の線が出せる筆」を意識して追求しています。

伝統工芸ではよく後継者の確保が課題とされますが、熊野筆にはまず市場の開拓が必要だと感じています。販路があり収入が確保できれば後継者候補も出てくるはず。そのために自分た

ちがどのような思いやこだわりで筆を作っているのかを、エンドューザーに伝える売り方や見せ方を提案しています。「伝統工芸を変えずに守り伝えるために、変わり続けることが必要なのではないでしょうか」。雅号に使った「游」の字には「形にとられない」という意味があり、そんな游哲氏の思いを表しています。



相応しい見せ方で新たな価値を

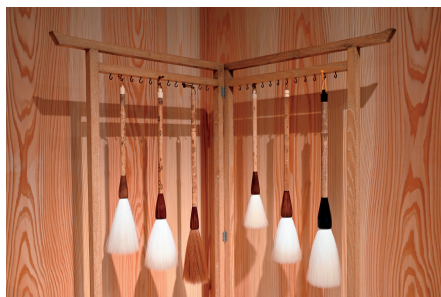
筆のあり方そのものへの挑戦



實森 得応

Sanemori Tokuo

伝統工芸士認定年月日：2013年2月25日



得応の今

「大量生産品もオーダー品も、買う人にとっては同じく1本の筆なんですよ」。得応氏の筆作りは常にそのことを意識し、品質がぶれないよう見本を傍に置いて、芯の強さや書き味を何度も確認しながら作っていきます。繊細な小筆から両手で抱えるようなサイズの超特大筆まで、あらゆる大きさの筆を作ってきました。

書家自身は毛の種類などを知っているわけではないので、書体や書く字を教えてもらい、その人の気持ちを汲み取りながらレシピを考えます。

書き味と同時に、軸やダルマ[※]、骨[※]などの見た目やコーディネートにもこだわります。

※ダルマ：穂首と軸を固定する部分
※骨（こつ）：軸の終わりの部分

「道具としての筆の一步先をイメージしています」という言葉通り、手に取るだけで気持ちが高揚するような美しい筆を生み出し続けています。

得応の過去

實森家は1907年に、曾祖父である四郎氏が創業した歴史ある筆工房です。幼いころから



筆作りは常に身近なもので、後を継ぐことを意識しながら育ちました。県外の大学に通っていた際、「筆を作るなら書についても知っておこう」と通い始めた書道教室を通じて著名な書家と知り合ったことが、大きな転機となりました。

そこで書家から直接要望を聞きながら、筆作りの修行を始めた得応氏。人脈が広がり、作風

や筆の好みが全く異なる様々な書家と直接接した経験から、使い手に寄り添う筆作りを意識できるようになりました。

一般企業への就職も考えましたが、早いうちに経験を積もうと決心。卒業後はすぐに工房に入り、30代のうちに伝統工芸士の認定を受けました。

得応の未来

書き味を追求した筆はそれ自体が自然な機能美を備え、人の目を捉えます。得応氏は書家との交流や熊野筆のPR活動を通して、価値に見合った筆の見せ方を考えるようになりました。

店舗のディスプレイを提案すると同時に、自宅の一角を改装。ギャラリーを設置し、書き味と見た目を両立させた作品を1点ずつ展示しています。

海外では和傘や竹かごなどの

和雑貨が、観賞用として人気を集めています。筆も見せ方を工夫すれば、高級感のあるインテリアアイテムとしての可能性が出てくるはず。

「手間暇かけて作る1点ものだからこそ、より良く見てもらいたいですね。子どもから見ても夢がある仕事にすることが、熊野筆の未来にも繋がるのではないのでしょうか」と話します。



技術革新がもたらす新素材の可能性に

未来の筆のあり方を見出す柔軟性

雄翠の今

雄翠氏は羊毛筆を得意としていますが、それだけでなく

注文を受ければどのような筆でも作ります。複数の種類の

毛を混ぜ合わせて作る兼毫筆では、濡らして平たく広げた

毛を何度も重ねて混ぜ合わせる「練り混ぜ」の工程で、均

等に混ぜるよう両側から交互に毛を広げていく姿が特徴的

です。腰が強すぎず粘りが出で、運筆でうまく毛を開いた

り閉じたりできる筆になるよう、毛のブレンドや配置を調

整します。

筆業界全体で原料毛の不足が問題視される中、状態の悪い毛を取り除く工程で出た毛も、できる限り別の部分に使



寺垣内 雄翠

Teragauchi Yusui

伝統工芸士認定年月日：2013年2月25日

つてきました。「筆先には使えなくても、根元に近い部分には十分な品質の毛もあります。今ある材料に感謝して無駄なく使い切りたい」と話します。

雄翠の過去

電気科を卒業し、電気工事士として働いていた雄翠氏。筆の製造会社を立ち上げた叔父から



誘われ、24歳で筆作りを始めました。「電気工事は基準内におさまればいいけれど、筆作りはどこまでもより良いものが求められる。そこが大きく違いました」。修行時代は朝8時に職場に入り、日付が変わるまで働く日々。筆作りを教えてくれたのは、代表である叔父でした。筆の需要が非常に高い時代で、作れば作るだけ飛ぶように売れた

といえます。筆の需要の減少を見越して会社がいち早く化粧筆の生産に乗り出した際は、化粧筆の開発にも携わりました。伝統工芸士の認定を受けて10年ほどで定年を迎えましたが、時おり自宅でも作業しながら勤務を続け、今は書筆の製作に専念しています。

雄翠の未来

「筆は作るたびに材料が全部違うでしょう？ 一生新しいものに挑戦し続けられるんです。本当に面白い」と目を細める雄翠氏。筆記具としての筆の需要が減る中で、そんな熊野筆の魅力を広く知ってもらい文化を継承していくため、伝統工芸士として社会見学の受け入れや筆作り体験の実施などに積極的に取り組んでいます。

原料毛の不足については、技術革新による天然毛に引けを取らない書き味の人工毛の登場に期待しています。イタチ毛や羊毛などの高級な毛を扱う技術を次世代に継承していきたいですが、今のままではなかなかそうした毛に触れる機会がありません。「産地として研究開発に協力することも必要かもしれません」と未来への提言をしています。



受注した書家の書体を徹底検証

理論的に作り上げる理想の筆



大久保 順敬

Okubo Jyunkei

伝統工芸士認定年月日：2018年2月25日

順敬の今

スタンドに立てかけたスマートフォンからラジオの音が軽快に鳴り響く中、真剣な面持ちで作業を進める順敬氏。昔から真空管ラジオや使い捨てカメラなどを分解しては組み立て、仕組みを理解することが好きでした。

書家から「この筆のこの部分を少しだけ長くしてほしい」「ほんの少し太くして」などというアレンジの要望を受けると、まずはインターネットで徹底してその書家の作品や書体を調べます。なぜその要望が出たのか、それによってどんな線が書ける筆が欲しいのか、どの毛をどの程度混ぜればそうなるか。

理論的に根拠を積み上げ、自信を持って提供できる筆を作ってきました。実演にも積極的に参加し、使う人の声を作品に取り入れています。

順敬の過去

高校卒業後、イタチ毛を得意としていた伝統工芸士の父から1年ほど小筆づくりを習い、筆



の製造会社に入社しました。職場は先輩の技を見て習うという世界でしたが、物づくりが好きだったためか吸収が早く、羊毛筆や兼毫筆などさまざまな筆の作り方を覚えました。試作を繰り返し、人一倍努力して早く仕事を覚えたといえます。慣れてくると持ち前の探求心を発揮。他の産地や他社の筆を買ったり借りたりしてきて「売

れる筆作り」を研究しました。伝統工芸士の認定を受けたあと40年ほど勤めた会社を辞めて数年前に独立。今は自宅の工房で、江戸時代まで主流だった紙巻筆を分解・再現したり、菊芋の茎を軸に筆を作ったりと仕事の合間に研究にも勤しんでいます。

順敬の未来

順敬氏は全国の伝統工芸士会でさまざまな分野の伝統工芸士と関わる中で、道具としての筆は文化の礎であると考えようになりました。漆工芸や焼き物、染め物の絵付けなどに、優れた筆は欠かせません。多様な伝統工芸を次世代へ継承していくため、筆業界全体で問題視されている原料の毛の確保に対し、国や行政が輸出国へ働きかけてく

れることを希望しています。

また後継者の確保も、文化継承の大きな課題です。会社では後進の指導にもあたっていましたが、筆作りには向き不向きがあり、一定以上のレベルに届く人は限られるといえます。

「彼らが安心して修行に打ち込むためにも、原料の確保にぜひ国が前向きに取り組んでほしいです」と、期待を滲ませます。





中川 聖峰

Nakagawa Seiho

伝統工芸士認定年月日：1981年12月11日



熊野筆統一ブランドマーク Kマーク
商標登録 第5885422号
熊野筆事業協同組合は、一定の基準を
満たし組合に登録した組合員に対し、
Kマークと通し番号入りのシール「熊野
筆証紙」を発行。筆やパッケージに貼
られています。



伝統マーク 承認番号R5-090
産地組合等が実施する検査に合格した
熊野筆にはこの伝統マークを使った
伝統証紙が貼られています。



2024

発行／
熊野筆事業協同組合
協力／
熊野筆伝統工芸士会
熊野筆筆司会

〒731-4214 広島県安芸郡熊野町中溝3丁目13-19

URL <http://www.kumanofude.or.jp/>

TEL 082-854-0074